

千里山線の想い出

九回生 飯島泰蔵

口羽様から寄せられました「千里山線 思い出の電車たち」という原稿のことで、お尋ねが御座いましたので、私の微かな記憶を辿ってみました。若干の思い違いが有るかも知れませんが、その節はご寛容下さい。

私が小学校へ入学したのは昭和七年四月でしたが、その当時の千里山線は単車で運行されていました。前方を照らすライトは腹の部分に一灯ついているだけで、出入り口の扉は手で開け閉めして居ました。やがて乗降客が増え始めたのに対処して、新たに2輛連結の電車が現れたのですが、車内で前後の車輛間を自由に歩き来する事は、未だ出来なかつたのです。

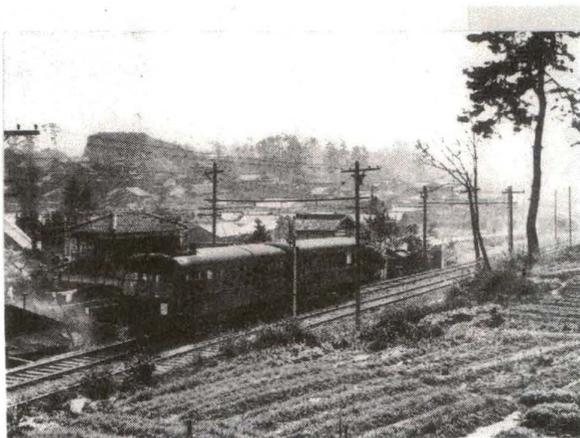
そのとき気が付いたのは、各車輛に番号が打たれて居たことでした。22と52、23と53、25と55と言う様に、前の車輛には20番台、後ろの車輛には50番台の番号が付けられて居ました。

千里山線の流線型は自動扉で、前後の車輛間を車内で自由に往き来出来ました。窓枠は大きく、何よりも座席のクッションが弾力性豊かで低めに設定されていて、恰も応接間の座席に腰を下ろす感じでした。尤もそれから立ち上がるときに、些か苦勞だつたことが思い出されます。

流線型はこの一列車だけで、後に続く列車は現れませんでした。昭和十六年の夏私は千里山を離れましたので、その後のことは存じて居りません。ただその頃には一般車両の前照灯は正面の頭上に据え返られ、自動扉となり、前後車輛間の往來は自由になつていました。が、車輛編成は実は2輛連結全盛時代で、3両連結にはなつていませんでした。

以上が私の記憶にある千里山線です。

お送り戴いた写真の中、1輛のものは初期の電車であれ懐かしい気がしますが、3輛連結のものは私が居なくなつた後の電車かと思えます。以上ご参考になるかと、拙文を添えさせて頂きました。



*千里山駅で焼けた電車の車両番号は25と55
でした(「阪急の電車」昭和55年阪急電鉄刊)。
事務局註

確か昭和十一年の秋だつたかと思えます。私は5年生になつていましたが、ある日の昼下がりに、突如として西の空にもくもくと巨大な黒い煙が立ち上がりました。何事かとみんな駆けだして、駅の方へ向かつたのです。千里山駅の奥まつたところに真つ赤な火柱が立っていました。2輛連結の電車が燃えて居る凄まじい光景を目の前にして、息をのむ思いだつたことを記憶して居ます。午後の授業が始まることも忘れて、2度と味わえないこの息詰まる光景に見取れていました。*車両番号は22と52だつた様に記憶していますが、間違っているかも知れません。このことは新聞にも報じられましたが、原因が何であつたかは覚えていません。

しかしその翌年の秋、素晴らしい電車が千里山線に登場しました。これが有名になつた「流線型」です。火車で焼けた車輛を改装して作られたものだつた、とのことでした。当時東海道本線を走っていた特急「つばめ号」の牽引車は、C55型という蒸気機関車でしたが、その少し前にこれが流線型に改装されて、評判になっていました。千里山線にもその流行が早速採り入れられたので、われわれは大満悦でした。